参考資料４

# わたしたちの信州学（概要）

**資料の位置づけ**　**長野県教育委員会が高校生向けに作成した『わたしたちの信州学』のうち、第１部「長野県のすがた」と第２部「地域の魅力が未来を拓く」の本文を AI（Microsoft Copilot）により要約したものである。**

**長野県教育委員会.わたしたちの信州学.長野県教育委員会,2016**
**https://ereading.tana.ai/nagano/book/shinshugaku/**

## 第１部「長野県のすがた」

### １｜長野県の成り立ち

**現在の長野県は、古代以来の信濃国を基礎としながら、近世の藩や幕府領、明治初期の府県再編を経て形づくられた。**江戸時代の信濃国には大小の藩や幕府領などが入り組み、地域ごとに異なる政治・経済・文化のまとまりが存在していた。明治期には旧藩を県に改める廃藩置県が行われ、その後の統合により長野県と筑摩県が成立した。さらに筑摩県庁の焼失を契機として統合が進み、おおむね現在の県域となった。

県名は県庁所在地に由来する一方、旧国名である「信濃」「信州」も地域を表す名称として現在まで広く使われている。**県域の成立過程をたどると、長野県が歴史的に複数の地域の集合として成り立ってきたことが分かる。**

### ２｜自然環境

**長野県は本州中央部の内陸に位置し、周囲を高い山々に囲まれている。**飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈などの山地が連なり、その間に盆地や谷が形成されている。標高差が大きく、地域によって地形、気温、降水量、積雪量が異なるため、同じ県内でも自然環境は一様ではない。

山地は県土の骨格となり、千曲川、犀川、天竜川、木曽川などの河川は県内外の暮らしや産業を支えている。**山、川、森林、盆地が織り成す多様な環境は、景観や生態系だけでなく、農業、交通、集落の分布、食文化にも深く関わっている。**

### ３｜都市と産業

**長野県の都市は、山地に隔てられた盆地や谷ごとに発達してきた。**長野、松本、上田、佐久、諏訪、伊那、飯田などの都市は、それぞれの地域の行政、商業、交通、産業の中心となっている。県内を結ぶ鉄道や道路は山地や峠を越えて整備され、県外との交流にも重要な役割を果たしてきた。

**産業は地域の自然条件や歴史と結び付いている。**冷涼な気候や標高差を生かした野菜、果樹、花きなどの農業、豊かな森林を背景とする林業、精密機械や電子部品をはじめとする製造業、山岳・高原・温泉を生かした観光業が展開されている。とりわけ製造業は、製糸業から培われた技術や人材を受け継ぎながら、時代に応じて業種を変化させてきた。

一方、人口減少や高齢化、担い手不足、中心市街地の空洞化、公共交通の維持など、都市と産業をめぐる課題も生じている。**地域の条件を生かして発展してきた産業を、社会の変化に合わせてどのように受け継ぐかが問われている。**

## 4｜文化

**長野県には、地域の自然や歴史、信仰、暮らしに根差した多様な文化がある。**各地の祭り、民俗芸能、社寺、宿場町、伝統工芸、郷土食などは、地域社会の中で受け継がれてきた。山々への信仰や街道を通じた交流も、県内各地の文化の形成に影響を与えている。

教育や学問を重んじる風土も、信州の特色として語られている。近代には学校教育や社会教育が広がり、地域における学びの蓄積が文化を支えてきた。**文化は過去から残されたものだけではなく、人々の暮らしの中で生み出され、交流を通じて変化しながら継承されるものである。**

**第１部のまとめ　長野県の姿は、県全体に共通する特徴だけでなく、山地に隔てられた各地域の歴史、自然、都市、産業及び文化の違いを重ね合わせることで捉えられる。**

## 第２部　地域の魅力が未来を拓く

### １｜郷土食「おやき」が伝える信州の味

おやきは、小麦粉などでつくった皮で野菜や山菜等の具を包み、焼く、蒸すなどして食べる郷土食である。**米が十分に取れない地域でも得やすい穀物と、季節の野菜を無駄なく使う暮らしの知恵から生まれた。**具材や調理法には地域や家庭ごとの違いがあり、その多様さ自体が信州の食文化を表している。現在では家庭の味であると同時に、地域外の人にも親しまれる商品となっている。

### ２｜長野ワインが人々を魅了する

長野県は、日照時間、昼夜の寒暖差、降水量、土壌など、地域ごとに異なる条件を生かしてブドウを栽培している。**原料となるブドウづくりから醸造、販売までを地域でつなぎ、土地の個性を表すワインづくりが進められている。**生産者の技術向上やワイナリーの増加に伴い、長野ワインは質の高さとブランド力で多くの人々を魅了するようになり、農業、観光、食文化を結ぶ存在となっている。

### ３｜命に感謝し、食の文化を広げる信州ジビエ

ニホンジカなどの野生鳥獣が増加すると、農林業や森林の生態系に被害が生じる。捕獲した鳥獣を単に処分するのではなく、衛生的に処理し、食材として生かす取組が信州ジビエである。**野生の命をいただくことへの感謝を基礎に、被害対策と地域の食文化を結び付けている。**安全性の確保、安定供給、調理法の普及などの課題に向き合いながら、新たな地域資源として定着させる取組が続けられている。

### ４｜ものづくりの技を継承し、次の時代へ

長野県の製造業は、製糸業で培われた技術を基盤に、精密機械、電子部品、楽器などへ展開してきた。**県内のものづくりを支えるのは、長年にわたり磨かれてきた職人の技能と、社会の変化に応じて新しい製品を生み出す力である。**例えば木曽地域の楽器製造では、木材を扱う技術と音づくりへのこだわりが受け継がれている。技能を次世代へ伝えるためには、若い担い手の育成と新たな需要への対応が欠かせない。

### ５｜「信州ロケット」が飛び立つ夢に向けて

精密加工をはじめとする県内企業の技術を結集し、ロケットの開発や航空宇宙分野への参入を目指す動きがある。**一社だけでは実現が難しい挑戦も、企業、大学、研究機関などが得意分野を持ち寄ることで可能性が広がる。**地域に蓄積された技術を新しい産業へつなげる試みであり、若い世代が科学技術やものづくりに関心を持つ契機にもなっている。

### ６｜外国人との共生から始まる多様性

長野県には、仕事、結婚、学習などをきっかけに暮らす外国人がいる。言葉や文化、生活習慣の違いは、情報の入手、教育、医療、地域参加などの場面で困難につながることがある。**互いの違いを**

**一方的に合わせるのではなく、地域社会を構成する一員として認め合い、支え合うことが共生の出発点である。**交流や支援の活動を通じて、多様な背景を持つ人々が共に暮らせる地域づくりが進められている。

## 7｜信州からエネルギー問題を考える

暮らしや産業を支えるエネルギーは、資源の有限性、地球温暖化、災害時の供給など多くの問題と関係している。長野県には、水、森林、日射、雪氷熱など、地域で活用できる資源がある。**エネルギーを遠くから受け取るだけでなく、地域の資源を生かしてつくり、無駄なく使うことが重要である。**小水力発電、木質バイオマス、太陽光などの取組は、環境への負荷を抑えるだけでなく、地域の仕事や資金の循環にも関わる。

## 8｜中心市街地活性化に秘策あり

郊外への大型店の立地や自動車中心の生活が進むと、中心市街地では空き店舗が増え、人通りが減少する。**佐久市岩村田の商店街では、地域で必要とされる店やサービスを考え、子育て世代や若者も関わるまちづくりを進めている。**商店街を単なる買物の場ではなく、人が集まり、支え合い、新しい活動が生まれる場として捉え直している。

## 9｜公共交通を守るため今できることは何だろう

人口減少や自家用車の普及により、鉄道やバスの利用者が減り、路線の維持が難しくなっている。一方、公共交通は、通学する高校生、運転できない高齢者、観光客などにとって欠かすことのできない移動手段である。**公共交通は、残すか廃止するかだけでなく、地域の暮らしに必要な交通を誰がどのように支えるかという問題である。**利用すること、運行方法を工夫すること、地域で必要性を話し合うことが維持につながる。

## 10｜リニア中央新幹線―人は何のために道を作るのか？

交通路は、人や物の移動を速め、地域間の交流を広げてきた。リニア中央新幹線は、東京、名古屋、大阪を結ぶ新たな高速交通として計画され、長野県内にも駅が設けられる予定である。**大きな交通基盤は利便性や地域振興への期待を生む一方、自然環境、地域社会、既存交通への影響も伴う。**新しい道をつくる意味を、速さや経済効果だけでなく、地域の将来や暮らしとの関係から考えることが求められている。

**第２部のまとめ　地域の魅力は、自然や特産品が存在するだけで生まれるものではない。人々が地域の課題に向き合い、受け継いだ資源や技術を生かしながら、新しい価値をつくる過程によって形づくられている。**